

Handbook of Clinical Neurology

小長谷正明

(昭和50年卒)

医学部のポリクリで、名古屋大学病院の地階にあった第一内科第四研究室、つまり神経内科の研究室の扉を初めて開けた時、最初に目の中に飛び込んで来たのは、整然と並んだ本棚である。文字通り、床から天井まで、大判で高さも装丁もそろった書物がぎっしりと詰まっており、その前で学究的な顔をした小柄なドクターが立ったまま、本を開いていた。後から思えば高橋昭先生であった。ミュージカル映画『マイ・フェア・レディ』のヒギンズ教授の書棚のようだと一瞬思ったほどだ。もっとも、あの書齋のようなクラシカルで落ち着いた調度も風格もなかったし、色白で愛想は良かった秘書の堀井さんもイライザ役のヘップバーンとは比べるべくもなかったが・・・。

昭和50年。新しい医局員となったばかりのある日、本棚の背表紙を読んでいると、サンタ・ルチアを口ずさみながら名古屋弁のオーベンが入って来た。9年先輩の室賀辰夫先生である。

「オミヤさんな、ここに並んでいるのはみな神経学の世界的一流ジャーナルだ。この **Brain** なんかは 1878 年からの一番歴史があつて、権威のあるやつだ。あの高橋昭先生が欠けているバックナンバーをきちんと集め、こうして製本して並べているんだ。すごい努力。一内四研の宝だ。この間、山村安弘さんがヨ、**Neurology** に若年性パーキンソニズムの論文を載せたが、たいしたもんだ。世界初だぜ。わしも、いつか出してみたいとあこがれているんだがな、なかなか難しいぜ」

この病気は後にパーキンソン病の分子生物学的解明の発端となった。名古屋弁の室賀御大は本棚の別のコーナーを指して、これも見てみいと言わさせる。ブラウンの荘重な装丁で、背表紙の黒い四角の中に金文字で書名が印字された、厚手の本が三十数冊も並んでいた。

「これはな、**Handbook of Clinical Neurology** といって、今までの神経病学の知識が詰め込まれているんだ。今、うちのプロフェッサー・逸郎・祖父江がスモンを書いてくれと依頼されているという話だ。これに書かせてもらうのは、世界の一流ニューロロジストというわけだ。ここの中の論文に一行でも引用されたら、自分の仕事が認められたということだ。まあ、先生も若いんで、これからだ。じゃんじゃんジャーナルに書いて、ハンドブックに引用されるようにがんばってチョ。」

臨床神経学ハンドブックという割には何百ページもあり、片手で持てるようなハンディな代物ではない。開いてみても何やら難しげで、いろいろな疾患や徴候についてぎっしり書かれてある。各章ごとの引用文献も、これまたため息が出るほどに細かい字面で何ページも埋められており、一つの病気についてでもたくさんの学者がいろいろな視点で研究し

てきたということなのだろう。とても、手引書なんてものではなく、どう見ても神経学のエンサイクロペディアだ。大学出たてのビギナーにとっては、ただ圧迫感を感じるだけの存在であり、簡便な手引書や入門書とは思えなかった。自分には縁がない本だと思った。

その後の僕は若い医局員の例に漏れず、臨床をしながら試験管も振り、貴重な症例や研究成果を論文にしていっていった。ワープロもパソコンもない時代なので、手書きで下書きをくり返し、清書してから教授やオーベン達に見てもらい、真っ赤になった原稿をまた清書してを繰り返すことになる。最初の論文の原稿は、もちろん、朱筆入りで返され、三度目には指導してくれた室賀先生と一緒に教授室に呼ばれて直々のご指導。最後には祖父江逸郎教授に「時間がない、わしの言う通りに書け」と口述筆記となり、やっと『医学の歩み』に投稿が許された。次の複雑な脳幹部障害の症例報告では、高橋昭先生に面倒を見ていただき、十数回もの書き直しの末に『神経内科』に出した。やがて、日本神経学会誌の『臨床神経学』にとグレード・アップした。何十回と英文タイプを打ち直した後に、はじめてアクセプトしてくれた洋雑誌は **Journal of the Neurological Sciences** と **Neurology** で、筋ジストロフィーについての研究である。刷り上がった論文に **Masaaki Konagaya** の文字を目にした時の、世界が開けたと、天にも登るような達成感を覚えている。同じ頃、やっと注目され始めたミトコンドリア病を **Archive of Neurology** に載せたばかりの岡本俊子先生から「私の **Archive** は紙質が悪い、あなたの **JNS** はきれいだわ」と、変に羨ましがられた。インターネットなどはまだなかったので、文献検索は **Excerpta Medica** や **Index Medicus**、医学中央雑誌のようなリファレンス誌を時間をかけてめくるしかなかった。基礎医学にかかわることや、最新の知見や考え方などは、夫々の分野のジャーナルにあたり、かのハンドブックをひも解くことはまずなかった。

学位を取ってしばらくして、奈良県立医科大学に新設された神経内科教室に赴任した。名大一内四研に入局したての頃に言われた言葉「年に二論文、一つは英文で十年続ければ教授になれる」を胸に秘めながら、ここでもよく論文を書いた。少しは視点を深めようと思ったのか、時には **Handbook of Clinical Neurology** を開くことがあった。一緒に赴任した榊原敏正先生が、これはオーソドックスな本だし、立派な装丁だからと揃え始めたのを、僕は指をくわえてながめていた。懐が乏しかった。ともあれ、何かのテーマで論文を書き始め、調べてまとめているうちに、次のアイデアも浮かんでくるという具合に、まだ若い頭は柔軟で熱気にあふれていたもので、プロダクティビティは亢進した。ただし、できたての教室だったので、臨床も研究も、教育も少人数でこなさなければならず、時間と心のゆとりがなかった。人材の層が厚かった四研とは異なり、リサーチやケースについてディスカッションしてくれる人も乏しく、意欲とエネルギーのスカラーは大きかったが、方向性のベクトルを定められない日々を過ごしていた。

三十歳代の半ばに、アメリカ東海岸のボルチモアにあるメリーランド大学への二年間の

留学に出してもらった。家人と二人三脚でラットと試験管相手のリサーチ三昧の毎日だったので、*American Journal of Physiology* をはじめとして基礎医学方面の論文の数は増え、留学先の教授には *Drs Konagaya are very fruitful for academic works* と言われた。このような表現もあるのかと感心し、臨床をやめてこのまま基礎的な道に入ろうかと思ったぐらいである。

一年半くらい経った時、ワシントン DC であった神経科学学会の書籍売り場に例の *Handbook of Clinical Neurology* の第二シリーズがあった。1980 年代中頃に臨床神経学のアイテムを一巡したところで、二巡目に入ったのだ。留学先のラボではリセプターだとか、細胞培養、RNA などの毎日だったので、*Clinical Neurology* の背文字がなつかしく、つい衝動買いしてしまった。それに、日本国内よりはかなり割安だった。アパートの本棚にぶん読ならぬ並べ読で、日本から持って来た文庫本や当座の本の隣にずっしり装丁の大判の本が四冊も並ぶと、部屋の格調も上がったような気がした。

日本に戻り、しばらくしてから今の奉職先の前身に移った。既に不惑を超えたにもかかわらず、大学では惑惑の日々を送り、物理的・人的環境に恵まれず、そこに自分と家族の未来を見ることができなくなっていた。ただ、ポジティブな言葉も一つは言われたことがある、「風雪に耐える論文を書け」と。

当時、この病院は貧弱でろくな研究用機器はなく、いるのはパーキンソン病と脳卒中後遺症とのちがいが曖昧なナースたちと、診断もついていないような変性疾患の患者ばかりだった。腰を落ち着けるつもりはなかったが、とりあえずやるべきことは二つに定めた。まずはナースをはじめパラメディカルの啓発教育であり、もう一つはじっくりと患者を診て考えることだ。どちらにしろ、初心に戻り、神経内科学の教科書を読み直す必要がある。パラメディカルへの啓発では、あやふやな知識や嘘を教えるわけにはいかないので、銜いを忘れて基本的なことから勉強をはじめた。また、こちらの頭も柔らかくする必要があり周辺知識も仕入れ、その結果として、岩波新書『神経内科』や中公新書『ヒトラーの震え毛沢東の摺り足』など何冊かの本の上梓となったと思う。後の方は、もちろん文献渉猟が必要で、ワシントンでの衝動買い以来購入しているハンドブックも役に立ちはじめた。

この病院は疾患のヴァリエーションこそ多くはないが、元来が国立療養所だったので、まだ平均在院日数もうるさくなかったので、多数例の経時的検討にはうってつけだった。難しい症例を最後まで見届けた上で剖検することもしばしばで、じっくりとした論文を縦文字でも横文字でも書けた。ただし、所属が大学ではないので、レフェリーのハードルは高くなったような気がした。それでも、大向こう受けを狙ったり、インパクト・ファクターを気にする必要ないので、自分の問題意識に基づいてデータや症例をまとめ、淡々と書いていった。それに、奇病難病の患者さんがただ苦しんで亡くなっただけでは、診ていた医者としては申し訳ない。きちんとした医学的記載をしてあげなくてはいけない。

その頃、バンクーバーであった世界神経学会の折りにご一緒した某先生から次のように

言われたことがある。「先生の論文は、先端的ではないけれど、博物学のような趣があります。その意味で面白いと評価しています」きっと誉めてくれていたのだろう。かつて、ダーウィンやメンデルも博物学者といわれていたのだ。

ある時、神経内科の十年以上もの後輩が病院を見学に来て、帰り際に瞬きもせず一言言った。

「先生はまだ論文を書いているんですか？」

四十歳を越えはしたが、まだまだと思っていたので、この言葉は意外だった。グサリと胸に突き刺さった。その後しばらくの間は、時折ワープロのキーを休めながら、展望もなくアカデミズムがメインでもない病院で、世の中に対してインパクトを与えそうもない、このような論文を書いている自分はなんだろうとふと考えるようになった。そしていつも、一種の保続行為かと苦笑し、またキーを打ち始めた。僕のぼやきを聞きながら、同じ神経内科医の家人がつぶやいた。

「ケースレポートというのは、神経学という学問大系、つまり大きな建物を造る一つ一つのレンガみたいなものと思うの。巨大なピラミッドも何十万個の石でできている。些細なものでも、これは大事と思ったことを記載していくことは、全然、無意味ではないわ」

その頃、彼女は28年間にも及ぶグアム島密林での潜伏生活からの帰還した元日本兵横井庄一さんにみられた臨床症状と神経病理所見についてまとめていた。

年に二、三個以上のレンガを何年も積んでいったがアカデミック・ポジションに戻ることはなく、結局は五十歳代早々に奉職先の鈴鹿病院長におさまった。それでもしばらくは同じように論文を書こうとしたが、すぐにプロダクティヴィティが落ちてきた。臨床現場よりはマネージメントに割く時間が多くなり、また、当直をしなくなったためでもある。急性期患者も救急車も来ないこの病院の夜は、アカデミック・ワークの貴重な時間なのだ。そして、僕も人間、易きに流れてもいた。

Handbook of Clinical Neurology は年にほぼ二冊のペースで増え続け、しばしば来客がある院長室にアカデミックな雰囲気醸すには、うってつけの調度となっている。すべてが並べ読ではない、何冊かの巻のいくつかの章はそれなりに読み込んでもいる。日本の神経内科の先生も執筆者に散見はするが、残念ながら多くはない。語学や文化圏の違い、コーカシアンでないことに由来するのだろう。それでも、引用は増えている。祖父江元先生をはじめ母校の神経内科教室からの論文も引かれている。

2010年1月、ハンドブックの95巻が届いた。僕の本棚の51冊目だ。神経学の歴史についての巻で、高橋昭先生が日本神経学を代表する碩学として *History of Clinical Neurology in Japan* の章を書かれていた。数多くの高名な先達の論文に混じって、ALS・パーキンソンニズム・痴呆コンプレックスについての僕の日本語論文も引用していただいた。奉職先の病院の近辺でみられる変性疾患だ。他の巻ではスモンや多系統萎縮症、原発性硬化症などで何編か引用されているが、このタイトルの巻での紹介は身に余ることであり、

望外の喜びであった。

……。ともあれ、これらの論文はみな、この病院での諦念と覇気とが入り混じった日々の記録である。積んだ石がピラミッドの表面を飾れたのなら、文字通り幸甚の極みである。